

「地元学の実践 ～ 発見 ～ 」

講師：吉本哲郎さん、横尾ともみさん、地元のみなさん、水俣のみなさん

講義日：2014年6月8日（日）、27日（金）、28日（土）

1 はじめての地元学 ～ 環境クイズ、一代記、出会った人インタビュー ～

【環境クイズ】

～あなたの身の回りのことについて教えてください～と問われた環境クイズ。自分ではほとんど分かるはずと、高をくくっていた。一問一問ノートに書き留めていく。ときどき筆が止まる。あれ？浅い視点でしか見ていなかったことに気づく。17問しか答えられない。最も身近なことが最もわからなかった。

事前課題の囲みに目をやると、「あなたはどこまで地元をしていますか？地元学を始めよく知らないことに気づく」から始まる吉本さんのことばの最後のくだりに「水俣では、水俣病のことを知らなかった、のではなく、知ろうとしなかったのだと。」とある。気づかされた。知ろうとしていなかったのだと・・・

【一代記】

おじいちゃん、おばあちゃんたちの人生を聞く。お年寄り話を聞いてくれるだけでうれしいと言う。そして、たくさんの知恵と経験、驚きに耳を傾けるだけで元気になる。

説明は苦手だが、言葉のキャッチボールならいくらかできる。あらかじめ、質問することを書きとめて、話を聞きにいった。お互い緊張しながら始めていったがだんだんのめり込んでいく、感情を入れすぎて涙する場面もあったが、最後には笑ってくれた。本当に会話をするだけで、お年寄りは元気が出るんだなと思った。いや、人は誰でも思いに寄り添って対話をすれば心を開いてくれるのではないかと思った。

【出会った人インタビュー】

地域を歩いている人に5つの質問をする。いたって簡単な質問だ。これまでにおいしかったものは？地元で好きな場所は？いままで一番うれしかったこと、楽しかったことは？いままで生きてきて大事にしてきたことは？地元を一言でいうと？についてだ。

声をかけるタイミングが難しい、いくぞと意気込むと避けられる。はじめてのことで、思うようにいかない。簡単な質問だけど意外と難しいという声が多い。思っていたより時間がかかる。何とか42人の声を聴くことができた。印象的だったのは、50代の男性と40代の女性が言った「この質問は、もっと地元を見つめ直さなさい。地元のよいところを知ってないの？」と投げかけているようだと言っていたことだ。

内容を見てみると、すべての質問の答えに、“絆”とか“誰と〇〇した”“誰がつくった”というように人が関わる思い出、思いが強く印象に残るようだ。このインタビューは、内容の分析も大切であるが、見知らぬ人に接すること、人の気持ちに近づくこと、地元の声を聴くことの大切さを学んだ。

2 地元学のすすめ ～ 講義と演習 ～

はじめて経験した地元学をもって望んだ。

【講義】

横尾さんによる一代記のお話があった。できるだけ地元の言葉で、聞いたままに表現すること。自分の思いを入れて書き込むとその人の思いが伝わらない。そして、タイトルをつけること。これは、一代記の顔であるのでそこにその人の思いが表現される。また、小見出しをつけて読みやすくし、伝わる工夫をすること、最後

には、感じたことをコメントすることが大切である。というアドバイスをいただいた。自分の一代記はタイトルがなかった。一代記の顔であるタイトルを入れ込むことでその全容がみえてくるようだった。反省点として、しゃべったままの言葉ではなく、分かりやすくしようとして書き換えている部分があった。

出会った人インタビューの演習の前に吉本さんの地元学のすすめ方のお話があった。

目的は①人、自然、経済の元気をつくる②ないものねだりをやめて、あるもの探し③個性の確認④調べたことを役立てる、の4つであった。特に②ないものねだりをやめて、あるもの探しが地元学の基礎となることが分かった。地元を知ろうとしていなかったことで、それがみえていなかったことに気づいた。

手順については①「これは何ですか？」事実には驚き、問いかける。②ひとつの物事に対して、3回は「なぜ？」を重ねる。③今でなく、昔も探る。④良いことだけでなく、マイナスのあるものを探る。ということであるが、あるものを探していくと、一般的によいことに置き換えてしまいがちになるが、「マイナスのあるもの」という発想はなかなか難しいと感じた。

そして、見えないものでも、絵地図などにすることで、みえてくる。これは、無形的な要素を持つ文化というものについて、関係する建造物など有形的なもの、配列などからも読みとることもできる。この感覚を養うことが大切なことであると強く思った。

【演習】

一班4名の構成で「出会った人インタビュー」で驚いたこと、気づいたこと、インタビューをしてどうだったのかをまとめる作業となる。2014 週末学校が始まって、はじめてのグループワークである。班でまとめても、個人で話してもいいが、一班の持ち時間は4分間でまとめることが条件である。私たちの班は、それぞれの特徴、気づきをまとめ、起承転結の構成で発表することにした。4人が起承転結のいずれかを受け持つ。それぞれが持ち時間1分で発表する。私は「起」の担当だ。1分という時間を使いきれないうちに話は終わってしまったが、グループワークにすることで、人により切り口が違ふ、それによって違う見方ができる。そして、やってきたことをもう一度自分に落とし込むことができる。さらに、時間を決めてまとめることで要点が明確になる。グループワークのいいところであると思った。

3 実録地元学 ～ あるもの探し ～

地元を見つめる地元歩き。水俣のプログラムまで地元のあるもの探しの始まりである。秋田県北部を流れる米代川の支流「小猿部川」の中流域に位置する七日市本郷地区について調べた。

調べたことは①小猿部川の恩恵・水の恵み②家並みと屋号から見えること③神と地域のつながり④村の肝いり長崎家本家「親方様」の4つを中心に調べた。

見えたことは①地形状、昔は川からではなく、ため池から引いていた。川に行くと岩をくりぬいた用水路を発見！②「下駄や」「とうふや」「傘や」「木綿や」「針師」「搗きや」「縄や」「桶や」「畳屋」という屋号で呼ぶ匠の住む地域であることを発見！③神明社周りを探索、「太平山」「目の神様」「馬頭観音」「水神様」が集中し、神々の集う場所パワースポットを発見！④民のために郡立農林学校を誘致し、農と学を育てた。近代農業と学問の発祥の地として誇りに思い、親方様と呼んで慕っている。私の地元学は「親方様と神々を慕う小猿部中流の民 ～農・学・技の歴史～」に決定した。

そのほか、家の周りの植物や好きな地元食も調べた。述べ4日間に渡った地元調査は発見の連続だった。

夕焼けがきれいだ。北西の白神山地に沈む夕陽を写真に収めた。今度は、小猿部川下流部に足をのぼそう！と。そこには、伊勢堂岱遺跡群、温泉、あきた北空港がある。

「あるもの探し」をして、地元が少しわかった。そして、愛着も少しわいてきた。

4 地元学の検証 ～ 化粧直し ～

天野製茶園からあさひ荘へ帰ってきた。お風呂に入り、杉本水産、水俣資料館、天野製茶園を振り返るべく、みんなで座学を始めた。間もなくして、事務局から広間に来るように指示があった。

広間では、吉本さん、横尾さんが全員の絵地図、パワーポイントに目を通していった。その傍らでは、よりよくするための化粧直しの作業が行われていた。私の絵地図も化粧直しだ。ただ貼り付けてある写真をテーマごとに囲みを入れ、それが何か分かるように見出しをつける。そして目立つようにする。絵地図がテーマどおりになっているか。の観点から化粧直しをしていった。

テーマと絵地図がミスマッチである。調べた内容が広すぎて焦点が絞られていない。一つのテーマで深堀をする必要がある。との指摘を受けた。マーカーペンでの修正と模造紙の切り貼りで修正していく。発表までの体裁を何とか整えることができた。まだできていない仲間のパワーポイントの修正を手伝う。吉本さんと横尾さん、そして事務局も同じ目線で助言と手助けをしてくれた。全てが終わったのがAM2:30だ。自分たちが遅くまでやるのは当然だが、自分たちの未熟さ故、吉本さんと横尾さん、そして事務局に難儀をかけてしまった。最後まで親身になってフォローしていただきありがとうございました。

5 5分間の地元学 ～ あるものデビュー ～

化粧直しして生まれ変わった地元学を発表する時がきた。

「驚いたこと、気づいたことはあったか、あったとしたら何か。やってみてどう思ったのか。」を簡潔にまとめて5分で発表する。そして、「不必要な品のいい前置きと、やりもしない後置きの言葉はいらない！」つまりは、要点だけ話せということだ。他の人の発表についても、驚きや気づきを「こう役立てたい」「こう使いたい」というコメントをポストイットに書き込みながら聞かなければならない。時間も2分と短い。

コメントは発表の要点を理解しなければ書き込めない。書き込まなければという焦りで、要点が頭に入っていない状況に陥ってしまい何を書いているのか意味不明である。案の定、事務局からコメントが感想になっているという指摘がでる。それでも、地元学の調べ方、ものを見る視点について書き込んでいた。演習のねらいをはずしている。

混乱した精神状態のまま、発表することになった。事前に要点をまとめ、箇条書きにし、準備してきていたので何とかなると思った。しかし、前日の化粧直ししたものに訂正していなかった。なんとも、いつもの詰め甘い自分がいた。

発表が終わって、質疑に入った。「見つけたものを今後どう使いたいですか？」という質問があった。ハッと思った。そこまで考えず、ただただ、あるものを探しただけだった。ここでも浅はかな自分がでてしまった。

6 弱点の克服 ～ 自由発想 ～

「ものごとは自由に発想し、慎重に計画し、大胆に行動するプロセスをたどります。」この中で、自由発想が弱いと感じています。と吉本さんは感じている。これを克服するための演習である。

演習の前に、吉本さんから「目的を決めて、あるもの探しをしないとあるものも見えてこない。どう使うか、どう役立てるかを考えることが大切だ」と言われた。まさに、自分にできていないことであった。

演習は、ポストイットに書き込まれている「役立て方・使い方」を参考に、自分の地元学をどう展開していくかを班毎にまとめること。自由発想の訓練として、班の全員とここにいる全ての人を対象にして「屋号」（あだな）をつけること。を課題とした。

ヒントは多くあるが、これをどう展開していくかを考えると、また思考が停止する。時間ばかりが過ぎてゆく。4人のうち半分しか今後の展開が決まらなかった。ニックネームは、何とかOB含め6人につけることが

できた。吉本さんが、自分にも「屋号」を付けてほしかったと言った。班の中の一人が、吉本さんに「ファラオ」、横尾さんに「静かなるクレオパトラ」と命名した。柔軟な思考に感服である。

7 地元学を学んで

何もないということはない。なぜなら、人がそこに住み続けているということは、人と人がつながり、生活の営みがある。そして、自然の恵みや心の拠りどころとなるものなど様々な要素が生まれ、自然発生的に文化が生まれる。それが、本来の生きるということではないだろうか。地元学は、その原点を探り、人が生活をするエネルギーを取り戻すことにあると思う。

手法としては、調べたことを絵地図などにするすることで、見えなかったものも具体的に見えてくる。見つけたものを写真に撮り、感じたこと、聞いたことを書きとめてグループ化していく。

そこから、共通点を見出してあるものとあるものを組み合わせて新しいものをつくり出していく。

そのとき大切なことは、ただ単にあるものを探すのではなく、驚き、気づきを一つ一つ掘り下げていくことである。そして、掘り下げていくときに、目的を持つことでその後、それをどう使うか、役立てるかということにつながられる。

まだまだ、地元学の真似事に過ぎない。当然、一朝一夕にできるはずはないが、継続して取り組み、いつかは自分のものに進化させていきたい。

また、演習を通じて自由発想力が弱いことが露呈された。裏側から見る、反対からみるなど常に、正面は違うという疑いを持つ、可能性の低いものを肯定していくというぐらいの気持ちで感性を磨いていきたい。